
瞳子の日常

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳子の日常

【ノード】

20276Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

私のうちには、変な絵がある。といつても変なのは見た目じゃなくて……『とーーー！オレを鑑賞しろーー！』　うちの絵画、しゃべるんです……。ナルシストおバカな絵画と、女子高生瞳子の短編連作。拍手に最新話がのっています。

宿題（前書き）

ノリだけでできています！

宿題

私の家には、変な絵がある。

『おい瞳子、ちょっと小一時間オレ様の観賞をしろー・そして褒め称えろ！』

壁に掛けられた綺麗な絵が、いつものようにそうわめいた。

言つておくけど、私の頭がおかしくなったわけじゃない。

「い・や！ あたし宿題するんだもん！ 3秒で我慢して！」

『なんでだよ！？ 見るこの美しい情景、鮮やかな色合いを…すばらしい「バルトブルー」じゃないか！ ああ、さすがオレ…』

たしかにフランス帰りのこの絵画は、輝きながら息をしているような青い海と、あるいは月の浮かんだ夜空がとても幻想的だ。私は絵についてはよくわからないけれど、初めてこの絵を見た時にはその青の美しさに思わず息をのんだ。 いきなり話し始めた時には、思いつきり叫び声を上げたけれど……。

こんなに神秘的な絵なのに、どうしたらそんな性格になつたんだろうか。人は見た目によらないって言つけど、それって絵にもあてはまるのかな？

『嫌だー！ 瞳子、オレを見る！ オレだけを見てくれええ！』

「あーもう、昨日ちゃんと見たでしょ！ わがまま！」

今日も今日とて、絵画は粘着彼氏みたいな発言をしてくる。彼は何しろ人に見られるのが大好きで、常に誰かに見つめられ、褒められていたいということなく病んだやつなのだ。多分彼は全人類が一生自分のことだけ見て生きていいと思つてゐる。ならいつそ美術館にでも行けと思うけど、母親が一日惚れして買ったかなり高価な絵らしいし、帰ってきた母親に『ああ、今日も素敵な青色！ 最高だわ！』と褒め称えられるのを彼も楽しみにしているようなので、取りあえずそのままにしている。

『オレの青の美しさは、シャガールを超えるぞ！ お前は恵まれた

環境にいるんだ！ もつとオレを褒めろ！」

「絵画、怒られるよ……」

シャガールの青を見たことはないけれど（見てみたいなー、とか
言つたらうちの絵画はどんな顔するんだろ）、そんな簡単に芸術を
貶してはいけないとおもいまーす。

「さて、宿題でもやると思いますかねー」

『一.
おおむねひづれ、塵子、いやだ』

絵画の叫び声。これに縛されではいけない。前に、あんまり悲しい声を出すので戻つてやつたら3時間ほど観賞をせられたことがあった。

「…………。まだされでは、こなに。」

子供のように私を呼ぶ声を背に、私は自分の部屋のドアを開いたのだった。

ホットケーキ

「うん、我ながらおいしい」

私は自分で作ったホットケーキをぱくりと頬張った。

ホットケーキごときで作るとか言っちゃいけないかも知れないけど、私の主食はホットケーキだ。ホットケーキさえあれば生きていける。科学の限界も超えてやるぞ！

『なー瞳子、それうまいのか？』

「うん、世界で一番おいしくよ」

『オレが見たことある料理の中では3番くらいにまずそうだぞ』
「わかつてないねー。ホットケーキは全ての食材にマッチするの。はちみつとかお好みソースはもちろん、ハム、チーズ、肉じゃが、納豆に漬けものだって最高の味にしてくれるんだよ？」

『そりだつたのか！ 知らなかつた、いつか食べてみたいものリストに追加しておーい』

「え？ 絵画じはん食べたいの？」

私はもじもじマグロのお刺身を頬張つて聞くと、絵画は『まーな』とそつけなく答えた。

絵画はもちろん絵画なので、食べたり飲んだりはできない。どうまで感覚があるのかはちょっとわからないけど、とりあえず視覚と嗅覚はあるみたいだ。

「そつか」

……なんだかちょっと絵画が可哀そうに思えてきた。絵画が『はん食べるなんておかしいことだけど、そりゃあ田の前で毎日こんなおいしそうなもの食べられたらそつ思つちゃうよね……』

「絵画……」

私が視線をやると、絵画は我慢しきれないとこつよつこ息を吸つて……

『だああーそんなことはいいから、さあさあオレを観賞してくれ

！瞳子はなんでオレ様みたいな素晴らしい絵の横でそんなくだらない行為をしてられるんだ！？もつとオレを褒めろ！食い物なんていつでも食えるだろ！』

え？くだらないこいつ！？

『この瞬間のオレは、今しか見れないんだぞ！一瞬一瞬オレは変化していくんだ！四六時中見ていろ！そして褒めろ！』

それが世界の真理だ！とばかりに言い放った絵画。

同情して損した。……人の思いを、ホットケーキを、一体なんだと思つてゐるんだ！

私は席を立て、それから……

「……よいしょ」

『おい瞳子、何を、うわ、やめるーー！つづえあー』

絵画を壁から外すと、床に置いた。うつ伏せ（？）に。

『つめたい、つめたいぞ瞳子ーー！』

「あ、温度感覚あつたんだ」

私は再びソファに戻つて、ホットケーキをぱくつと口に入れれる。うん、おいひー。

『とーーーー、暗い、見えないーー！とーーー！おおーー』

『……食べ終わるまでがまんしなさい』

ホットケーキを侮辱するものは許さないぞー子供みたいにみーみ

一言い始めた絵画を無視して、私は食事を続けるのだった。

ホットケーキ（後書き）

読んでくださいありがとうございます！

されません。

あとこのページ、目がちかちかしないでしょうか……？

ただけると嬉しいです。

（）「やべこにはれはやからせ……」（）

『なあ瞳子ー、ここに何故こんなにドロドロドロドロしてこるんだ?』

夜、今流行っている恋愛ドラマを観ていると、絵画が不思議そうな声で言つた。

「恋愛についてのものだからだよ。女の嫉妬は怖いって言つてしまつ?」

私はそう言つてじつと画面に見入る。しかしひロインが、自分の恋人と親友の「らぶらぶシーンを抨撃したところで、エンドロールに入つてしまつた。続きはまた来週。

「あー、ほんとに焦らすよねー。こっちの方がやきもきしちゃうよ」

私はそつと机の上の蜜柑を食べる。この前青りんごを絵画の前で食べようとしたら、『オレはそんな色を青とは認めない!』と大騒ぎしてつむれなかつた。緑でも青信号だし、昔は緑も青つて言つてたんだよ、と言つても絵画は『意味がわからん! 青は青だ!』とまったく聞きいれる様子がなかつた。本当に面倒な絵画である。私はCMを眺めながら、ぱくりと蜜柑を口に入れ。

オレンジ色の蜜柑はよく熟れていておいしい。ちなみにすじは面倒にならない程度には取るけれど、別に付いていても気にはしない。付いてた方が栄養あるって聞いたけど、本当かな。

『ほー……そういうものか。オレには理解できないな』

「まあ私もさつぱりしてるとか好きだよ。昼ドラマとか大変なことになつてるときあるしね。あ、でも『この泥棒猫ー!』っていうのは1回くらい言つてみたいかも」

でもやつぱりそんな展開になつたらめんどくさいかなー。うーん、やっぱいいや。お前はもう死んでる!とかは現実にあつたらホラーだし……月に代わってお仕置きよーとかがいいかな? そういう

ば今の美少女ものって素手で戦つたりすることあるよね。パンチとかキックとか。やっぱり手ぶらの相手に道具はダメってことなのかな? ただでさえ敵1人対大勢とかあるし……まあどうでもいいつか。
『瞳子、まさか……あのぐにゅっとして毛の生えただけの、『いやーにゃー』うるさい奴らが好きなのか…………?』

なんか『Gから始まつてりで終わる、黒光りするアレみたいな言ひ方するな……。

「そう言つ意味のセリフじゃないんだけど……まあ好きだよ、猫。可愛いいし」

私が言つと、絵画はくわつと顔色を変え(たぶん人間だったたら、という比喩表現だけ)て、『そんなバカげた話があるか!』と大声を出した。

「あいつらがかわいいだと!…? とんでもない、あんな下劣な下等生物ども!」

「…………ねこひやんバカにするんじゃありません! で、一体何されたの?」

絵画は基本的に自分のことしか興味がないので、特別何かを好きになつたり嫌いになつたりすることが少ないと思つ。この取り乱しよつは、きっと何かあつたに違いない。

絵画はつおおお、と唸つてから、心底思い出したくないとでも言うように重々しく言つた。

『あいつは……オレのこの高貴なる身体に……ま、マーキングを……』

あ、なんかわかつた。

「…………絵画、ちょっとお風呂場に……」

『未遂だ! かなり昔のことだしな、しかしあいつらときたら、ぐぬぬぬ……』

相当なトラウマになつてゐるらしい。(気持ちは分からなくもないけど……いやでも、私はやっぱりねこちゃんが好きだ!

「あつとほら、猫もさ、絵画が綺麗だからマーキングしたくな

つちやつたんじやないかな……？

苦笑いの末に私は優しさを込めて、絵画にそりかで書いた。絵画は少しの沈黙の後、

『お、おお、なるほどなーあにつらもなかなかわかっているじゃないか！よし、もうこわくない、こわくないぞーー。』

絵画はそう言つてまた、『とーー、オレのどこから辺がどうきれいか具体的にいつてみろー。』とかふんぞり返つたけれど、次の瞬間テレビに映つた猫を見て、『ぎゃーー』と声を上げていた。

「……絵画、絵画はねー、まずこの海がすっごくことと思つた。神秘的なのに、それでいてお母さんみたいにあつたかいかんじがするよね。あと私はこの黄色い、とろけそうな、ホットケーキのバターミたいな月も綺麗だと思つたなあ」

『お、おお、わかるか瞳子ーー。ですがオレの所有者の娘だー。』

もつと褒めるとふんぞり返る絵画に、私は空が綺麗とか、やつぱり青色がいいとか、いつもの倍くらい一寧に絵画を褒める。

『ふふん、ですがオレ、あのぐしゃぐしゃどもこむの美しさを悟らせてしまつたんだなー。』

満足そうに笑う絵画を見て、私は引き攣つた笑いを浮かべた。

明日知人のねこちゃんあずかるの、絵画にはまだ黙つておこうかな……。

ねい（後書き）

拍手お礼なのにローテーション早いやーと思ひながらも、なぜか書き忘くなってしまったので更新です。このように今後も気まぐれに更新したり停滞したりすると思われます。

拍手も更新しました！よろしければそちらもどうぞ。そして感想や突っ込みなどをいただけるととてもうれしいです。
読んでくださつてありがとうございました！

「夏田ちゃん、いらっしゃーいーも、入つて入つてー！」

「久しぶり、瞳子。元気そうね」

今日は「」の夏田ちゃんが遊びに来てくれた。夏田ちゃんは私と同じ年の女の子だ。今は遠くの学校に通っているからあまり会えないけど、小さい頃はよく一緒に遊んだりしていた。

おじぎ致します。ほい、これお土産

「わー、ありがとう!……おばさん今度はカナダに行つたの?」

三浦されたのに、瓶入りの高級そばが入ったリミットがするサボテン。

「ちよつと今まで。今はイギリスにいるつて言つてたわ」

夏田ちゃんのお母さん、つまり私のお母さんのお姉さんが、いつ

「そつかり、あがはせらむせしめうだる」

「まあ、本人が楽しそうだから良いんじゃない？でも瞳子のところも大して変わらないでしょ」

「あはは、でかいのは夏田ちゃん」とリビングでなごみ

私のお母さんも、夏田ちゃんのお母さんほどではないにしろ、絵画を買えちゃうくらいにはバリバリの仕事人間だ。夏田ちゃんも将来は出来る女になりそうだし、やっぱり血なのかな。……え、私？

元
卷之二

「うれしいなー、こんなに高級そうなメーナルシロッパはじめて！」

夏田ちゃんが眉を寄せて言ひへ。

失礼なホットケーキは最高の食べ物だよ!!それはせやんと

「おかずとして野菜も魚も食べててるから大丈夫！」

いやそれかおかしいと懸念だけれど……まああんたかしいわ

夏田ちゃんは、一応栄養は摂ってるのよね……と苦笑いを浮かべたけれど、その後は何も言わなかつた。よし、今日は夏田ちゃんにホットケーキの素晴らしさを教えてあげよう。その瞬間私の中で、今日の献立が決まる。今日の夜は、豪華に手巻きホットケーキだ。あとでお刺身買わなきゃなー。

『夏田、よく来たな。お前も早くオレを見たくてたまらなかつただらう』

リビングに入ると絵画がふんぞり返つてしゃがみついた。絵画の中では、世界中の人々が絵画に日々焦がれていくことになつてござる。ほんと、じまつた絵画だなあ。

「あなたはほんと変わんないわねー」

『当たり前だらう、オレはもう完成品だーこれ以上美しくなる』となんて不可能なんだぞー!』

私の記憶ではこの前、オレは一瞬うちに変わるひきこむたように思えるんですが……。

「あー、はいはー」

夏田ちゃんは呆れたように、絵画を見て笑つた。

夏田ちゃんは、絵画が話せる」と知つてゐる。

普通の人は絵画がいきなりしゃべりだしたらびっくりすると思うんだけど、夏田ちゃんは『あら、あなたしゃべれるの?』なんてなんでもなく受け入れていた。ちょっと聞いた話によるとびっくりやら夏田ちゃんは変わった体质らしくて、じついう変なものには慣れているらしい。慣れるほど、変わったものがいるの……見てみたいよつたな、見たくなじよつたな……。

さあオレを観賞しし、と威張る絵画に近寄つて、私はぴつと指を立てる。

『絵画、夏田ちゃん疲れてるんだから後にしてね。夏田ちゃん座つてて、私お茶淹れるね。ホットケーキはメープルシロップ?それと

もチヨコシロップ?」

「いや、そんなおかまいなく……」

夏田ちゃんたらなに今更遠慮しての?全然気にするじとないのに。

『疲れている時にオレを観賞しりよーどりだ、癒されるだらつ夏田ー!』

「もひ、疲れたらホットケーキに決まってるでしょ~夏田ちゃんはホットケーキを食べるの!」

むむむ、と絵画と睨みあう私。

「あんたたち、実は結構似たもの同士よね……」

なにか夏田ちゃんの声がしたけど、その声は私と絵画の言こあつ

声にかき消されて、残念ながら私の耳までは届かなかつたのでした。

「夏田ちゃん、学校はどう? 最近はなんか危ない目に会つたりしてない?」

別に気にしなくていいのに、夏田ちゃんは丁重に私の申し出をお断りして、お煎餅をかじつた。私は向かいでホットケーキにたっぷりメールシロップをかけて、黄色いバターをのせて食べている。さすが本場のメープルシロップはおいしくて、思わずどんどん食べてしまつ。なんだか私だけ申し訳ないなあ。

夏田ちゃんはその体质柄、日常的におかしな事態に遭遇している。靈感とかは特にないらしいから心靈現象に会つことは少ないみたいだけど、そのほかのいろいろ……とにかくいろいろに出会う天才みたいな人なのだ。

夏田ちゃんはお茶を一口飲んでから、そう言えども、と口を開いた。
「IJの前悪魔とゲームしてきた」

「……なにそれ」

予想外の答えに思わず返事が遅れてしまう。

どうして日常会話に悪魔が出てくるの、とか聞いてはいけない。何故ならこれが夏田ちゃんクオリティーだから。これが紛れもなく夏田ちゃんの日常だから。そしてそのゲームって言うのはおそらく、テレビにつないでピーピーできたりるあのゲームでは、ないよね……?

「いやー、もうちょっとで魂取られるといだつたわよ。子供みたいな姿のくせにえげつなくつてもつ……」

私がなんて答えていいのかと迷つていると、夏田ちゃんは、「あ、でも勝つたよ?」と付け足した。

そういう問題じやないよ、夏田ちゃん……。

夏目ちゃんはしつかりものなんだけど、なんか常識がずれている
といふか、ずれざるを得なかつたと言つべきか……ほんと、よく今
まで無事に生きてこられたよなあ……。

そう思えば、この肝の座った性格もなるべくして、こういうことなのかな。

私が聞いた限りでも、どう考へても一般人には起こり得ない出来事が、夏目ちゃんには6月に雨が降るのと同じくらいの確率で起きている。つまり私の夕飯がホットケーキなのと同じくらいの確率。

我がイトコながら、恐ろしい人だなあ……

それでも周りに頼りになるお友達がいるらしいから、ちょっとほ

安心だけど

私がもう笑うしかないで笑いながら言うと、夏田ちゃんは少し

黙つてから、

「いや、あんたもなかなかよ?」

そう書いて絵画の方を見て、お互に困ったわね、と壁を上けた。

よー！ついでお前も褒めるー』

- 1 -

絵画が後ろで喚いている。

言われてみれば……言われなくてもわかるけど、たしかにこの絵画も私が息をするのと同じくらいこの確率で、いつも同じことを喚いているなあ……。

「やつぱり、血は争えないってことなのかな？」
夏田ちゃんが絵画を見て、私の考えていたのとおんなじよつない

七八

『とーじー！ とーじおおおおー。』
絵画の声が、リビングに響き渡る。

夏田ちやんはあんまり情けない絵画の声に、ふと吹き出した。「すみません、つちの絵画が……」

なんか恥ずかしい、恥ずかしいんですけど絵画へど。やめてよもうお姉さん来てるのにいい！

私は止まない声に一つ溜息をついて、それから、

「ほんとに、私たちなんでこんなことになつてゐんだらうね」と顔を見合わせて、夏田わやんと2人、あはは、と苦く笑いをこぼした。

ことじへ（後書き）

ことじの夏田ちやんです。

本当は夏田の話の方が先にあつたんですが、長すぎてなかなか書けません。ちなみに夏田の日常はそれなりにほのぼの、でも割と命の危機にさらされたりしています。

読んでくださいってありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276y/>

瞳子の日常

2011年12月1日21時05分発行